

# 土着的革命としての明治維新——メーチニコフの日本観の先駆性

渡邊雅司

一、いかにして外語の教授となりしか

知識人たちがどうにもじつとしていられず、半ば衝動的にどこかをめざして動き出す時期が歴史にはあるようだ。ロシアの一八七四年もそういう年であった。ロシアではこの夏、数千人の青年男女が、大学を、書物を捨て、あるものは教師として、あるものは行商人や助産婦に身をやつして農村へと入っていった。「狂った夏」と呼ばれるヴ・ナロード運動の絶頂期である。

民衆を啓蒙する、いや民衆に学ぶべき、その前に民衆と一体化しなくてはならない、とそれぞれが内的衝迫を抱えていた。彼らをこうした運動にかきたてたのはその数年前に出版された一冊の本だった。『歴史書簡』（一八六八―六九）と題されたこの本で、著者ピョートル・ラヴロフは、進歩の代償という道徳的問題を知識人に差しつけていた。知識人が高度な学問を学び、文化的な生活を享受できるのは、勤労大衆であるナロードの血と汗の結果である。だから知識人は、今こそその進歩の代償をナロードに支払わなくてはならない。そうすることによってはじめて知識人は「批判的に思考する個人」すなわちインテリゲンチヤになることができる、とこの書物は訴えていた<sup>1</sup>。

一八六一年に農奴解放令が出されたとはいえ、大多数の農民は債務奴隷としてそれまで以上に過酷な労働条件にさらされていたという事情がそこにはある。

しかしさらにもう一冊の本が、この動きに拍車をかけたのだった。『進歩とは何か』（一八六九）と題されたこの本で、著者ミハイロフスキーは資本主義の根底にある社会的分業が実は進歩ではなく退歩であることを鋭く暴いて見せたのだった。社会的分業によってなるほど生産力は飛躍的に伸び、国富は豊かになるかも知れないが、労働者はまさに一本のネジにされ、精神的、肉体的に一面性を余儀なくされる。果たしてこれが進歩と呼べるのか、と著者は問いかける。この時期世界は社会ダーウイニズムの支配下にあり、帝国主義的な植民地獲得競争が進むなか、どの国も国威の発揚と、国富の向上に躍起となっていた。しかし社会の学たる社会学は、国家ではなく、一人ひとりの民衆、個人をその根底に置かねばならないと、ミハイロフスキーは視座の転換を訴えた。そこから生身の個人にとつての真の進歩とは、一人の人間の肉体の各器官における最大限の分業であり、それを体現しているのが独立生産者の立場にちかいロシアの共同体農民だとされたのだった<sup>2</sup>。デュルケームの分業論を先取りするようなこの進歩観は、思うに当時の知識人

にとつては大きな発想の転換を迫るものであつたはずだ。

この一方で、同じくナロードの方をめざすといつても、実際に農村へ向かうのではなく、自分自身の内部にナロードを求めようとする動きも出てくる。数年後に宗教哲学者のヴラジミール・ソロヴィヨフは「神人に関する講義」(一八七八—八〇)という公開講義をし、そこで独自のキリスト論を展開したが、同じく「神人教」を唱え、アメリカにわたつた知識人のグループもあつた。それを導いたのは、一時期ナロードニキ運動の母体となつた「チャイコフスキー団」の創始者ニコライ・チャイコフスキーであつた。彼はロシアのナロードが神を孕める民だとしたら、知識人たる自分自身の内部に神を持ってないかぎり、ナロードとの一体化などありえないということに思い至つたのである。帝政下のロシアではそれを実践できないと考えたこの集団はアメリカのカンザス州に自給自足のコロニーを作つたのだつた。後に「カンザスの神人」と呼ばれる彼らは、帰国後作家のレフ・トルストイの民衆観に大きな影響を与えることになる。

ところでこうした歴史的うねりの中で、維新革命を果たした明治日本をめざした亡命ロシア人革命家がいた。彼こそは開設まもない東京外国語学校魯語科のお雇い教授となるレフ・メーチニコフ(一八三八—八八)である。といつても彼は最初から外語の教師になるつもりで来日したのではなかつた。そこにはまず革命なつた日本に行つてみたいという強烈な意志があつた。彼が明治維新の報に接したのは、パリ・コムニオン敗北後のパリだつた。世界初の労働者政権として知られるコムニオンが圧殺された後のヨーロッパは政治的反動の嵐が吹きすさん

でいたとメーチニコフはいう。そんな中で極東の島国日本、西欧では中国の付属物ぐらいにしか考えられていなかった日本で、こともあろうに革命が起こつたというのだ。

一八五九年以来亡命生活を余儀なくされていた彼は、十種類ほどのペンネームで、ロシアの諸雑誌に論文を発表してきたから、ロシア国内で澎湃として起こつてきたナロードニキ運動にも敏感であつた。ナロードニキ思想の根底にはいわゆる「後進性の優位」の思想がある。ロシアは歴史的に西欧に後れているが故に、西欧が陥つた誤謬をおかさず、先に進むことができるというのがその骨子であつた。そこでいう「後進性」の中身とはミールと呼ばれる農村共同体の存在であり、「無知蒙昧」ながら伝統の中に生きるナロードであつた。そしてそのナロードに出会うために、ロシアの知識人たちは農村をめざした。これはいわば「後進性」の実像を知る行為であつたといつてもいい。然るにこの当時アジア、東洋とは、西欧人にとつてはまさに後進性のシンボルであつたらう。したがつてこの時代にアジアをめざすということは、思想的にヴ・ナロード運動と通底するものがあるというのが私の年来の仮説であつた。メーチニコフの事例はこの仮説の格好の例証となるにちがいない。

先ほどメーチニコフには日本への強烈な意志があつたと書いたが、それだけで日本行きが実現するはずがない。しかしメーチニコフは手をこまねいてはいなかつた。彼は日本語の勉強を志すのである。「それまで僻遠の地をほうぼう放浪してきたおかげで、わたしには、ある国のことをまじめに研究しようと思つたら、その国の民が話す言葉をもにすしかないとこの不動の確信があつた」<sup>3</sup>。この時メーチニコフはすでに十三ヶ国語

をマスターしていたという。しかもそこにはヨーロッパ諸語だけでなく、かつてペテルブルクの東洋語学部で学んだアラビア語、トルコ語も含まれている。メーチニコフは、ガリバルディ軍のスラヴ義勇軍の副官として、かのリソルジメント運動に加わり、各地を転戦、ナポリで重傷を負い、以来義足と松葉杖生活を余儀なくされていたのだ。この解放戦争のときから、すでにポリグロートであるメーチニコフの存在は異彩をはなつていたようで、かの『三銃士』の作者のアレクサンドル・デュマが野戦病院にいたメーチニコフに援助を申し出ているのだ。しかもそもそも画家をめざしてイタリアに潜入した彼は、従軍中もスケッチブックを手放さなかつたらしく、彼が描いた何枚もの兵士の肖像画が残っている<sup>4</sup>。

この画才とも関係するが、独学で漢字の勉強を始めたメーチニコフにとって、本来象形文字である漢字の習得は苦痛というよりも楽しかったに違いない。彼は後に頼朝や家康の肖像画を模写しているが、そこに残されている漢字の筆跡は、外国人のものとは思えないほど、見事である。しかし一人で漢字を練習しているだけでは日本への道はひらけるはずもない。日本語という言語にも興味を持ったメーチニコフは、当時ヨーロッパで唯一日本語科を置いていたパリ大学のレオン・ド・ロニー教授の門を叩き、教えを請うのであった。このロニーという人物は福沢諭吉や栗本鋤雲らとも親交があり、「よのうわさ」などというひらがなの新聞を出し、さらに羅尼などという漢字の印鑑をもっていたというから相当の奇人である<sup>5</sup>。さすがのこの奇人も、その上を行くメーチニコフの数奇な運命には度肝を抜かれたであろう。日本語の難解さをいくら説明しても、このロシ

ア人はひきさがる気配がない。そこでロニーは「その頃スイスに滞在していた日本の若い大名(封建領主のこと)への紹介状を……書いてくれた」(二二二)のだった。この大名が誰かは、まだ特定できていないが、この一歩がなかったなら、メーチニコフが外語の教授になることは決してなかったはずである。

「指定された場所に行ってみると、わたしの教師となるはずの人物は、ヨーロッパに暮らした若年の日本人の大半がそうであるように、早くも肺患をわずらい、すでにニースに発つたあとだった。だがそのかわりに、彼の部屋にはなんと別の日本人が住んでいたのである。ただ違うところは、この日本人はフランス語が一言もしゃべれなかつたことである。

わたしを迎え入れたのは、とびきり洒落たグレーの背広を着込んだ、さほど若くはない紳士だった。彼はばかに大きい唇に喜びの笑みをうかべ、法外なまでに幅の広い顔に、極小の鷹鼻を置き、ニスを流しこんだ二つの細い隙間といったかっこうの眼をしていた。彼の齒の異常な白さと、ちっちゃな手足の優雅さが目についた。」(二三)

一方この時の模様を、この日本人は日記にこう残している。「夕景、一人ノ魯西亜人來ル、能ク日本語ヲ解ス其内ニ同行セシコトヲ乞フ、依テ同車ニテ行キ、夜八字帰ル、此人ハ仏ニテ我語ヲ学ビタリトテ能ク字ヲ読ム、我モ大ニ便ヲ得タリ、故ニ一字ツツ互ニ教エルコトヲ約ス」(一八七二年九月一日)

この人物に出会えたことはメーチニコフの強運としか言いようがない。日本人が多すぎるパリではフランス語の勉強には適さないといつて、あえて日本人がほとんどいないジュネーブを留学先に選んだこの気骨ある日本人の名は大山彌助、後の

大山巖陸軍元帥である。しかもこの直前に盟友山県有朋に出した手紙で、大山はいい年をしてフランス語のアベセを学び始めた自分のおろかさを自嘲気味に嘆いていたのだった。この時大山三十歳。「我モ大二便ヲ得タリ」というくだりは、そうした文脈で読む必要がある。一方メーチニコフの筆にかかるとこの初対面の模様はかなり違ったものになる。「彼が何語で話しているのかは判じかねたが、わたしにはこれ以上彼と話してもどうにもならないということだけははつきりわかった。聞き覚えのある音までが、彼の口から発せられると、わたしの耳にはなにかこう奇妙に空ろに響くのであった。それはまるで彼の口の中に、柔らかな綿でも敷きつめられているかのようだった」(二三)。

それまでのメーチニコフの足跡を追っておこう。一八六四年にフィレンツェで思想的な師ともいべきミハイル・バクーニンと出会い、流刑地シベリアから日本、アメリカを経由してヨーロッパに奇跡的に舞い戻ったこの革命の巨人に、おそらくゲルツェンの指示があつたのだろう、メーチニコフは援助の手を差し伸べたのだった。亡命のベテランとも言うべきメーチニコフは、それ以後も多くのロシアからの亡命者の世話役をすることになる。そこにはチホミーロフ、スチエプニヤーク・クラフチンスキー、プレハーノフ、クロポトキンといった錚々たる革命家の名が浮かぶ。メーチニコフの豊富な人脈と、何よりもその語学力が大いに役に立ったのであろう。

この一八六四年に、バクーニンの帰還を知ったポーランドの革命家集団が接近してくる。その前年、ポーランドで起こった民族蜂起はツァーリ政府によって弾圧され、多くの革命家が国

外に逃れていたのであった。一方ロシア国内では、この蜂起をきっかけとして、革命運動に対する取り締まりが強化され、反動的な空気がひろがっていく。かのドストエフスキーが『地下室の手記』などの作品でニヒリズム批判を展開しだすのもこのことと関連している。

ポーランドの革命家集団は、革命の巨人たるバクーニンに、もう一人の伝説の革命家ガリバルデイの地中海艦隊を動かすよう仲介を依頼してきたのだった。当時ガリバルデイはすでに政治の場から退き、カブレラ島に隠棲していたのだから、彼を動かすには、個人的にこの老将と面識のあるメーチニコフに動いてもらうしかない。かくてメーチニコフはバクーニンの指示でふたたびガリバルデイに面会を求めたのだった。

こうした歴史の隠されたページとも言うべき事実は、メーチニコフの遺言で、その死の九年後に『歴史通報』誌に発表された彼の遺稿「一八六四年イタリアにおけるバクーニン」によって初めて明らかにされたものである<sup>6</sup>。このことが示すように、メーチニコフは回想的な記述には異常なまでの神経を配っていた。その証拠にメーチニコフは大山巖の実名を出すことすらなく(「善良な日本の將軍」とだけ記す)、また彼への日本語の手紙でも「びつこの魯人」とだけ署名するのだった。このために『元帥公爵大山巖伝』の編者は長いことこの魯人の特定に困ったという。

ところでガリバルデイの一件はどうなったかというところ、メーチニコフの説得が功を奏したのであろう、ジェノヴァを启航する直前まで行くのだが、その前夜に、計画が発覚し、地元警察によってこの世紀の大遠征は頓挫させられたのだった。なに

しるこの地中海艦隊は黒海経由でオデッサまで行き、そこから陸路ワルシャワまで攻め上るといふ気宇壮大なものだったのだ。そしてこの事件がもとでメーチニコフはイタリアを去り、ジュネーブに活動拠点を移すことを余儀なくされたのであった。ほぼ時を同じくしてそれまでロンドンで活動していたゲルツェン、オガリョーフもスイスに移り、ジュネーブはロシア人亡命者のたまり場となっていく。「若きロシア」という新たな亡命者のグループがそこにはでき、ウーチン、ニコラーゼ、ノージン、セルノ・ソロヴィエヴィチら六〇年代ロシアで革命運動を担った人物が大挙してジュネーブに移ってきたのである。そんな中で一八六八年には第一インターナショナルロシア人支部（バクーニン派）がこの地にできている。メーチニコフはゲルツェンの信任を受けて、このグループのまとめ役的存在となり、若き世代とゲルツェンの間で、思想的確執が起こった時もある。その仲裁役を果たしたのだった。若き世代の教養の低さと過激さに落胆していたゲルツェンがメーチニコフの文才を高く評価していたことだけは確かである<sup>7</sup>。

そればかりかメーチニコフはグルジア出身の革命家ニコラーゼとこの時期、『現代』という雑誌まで発刊している。しかも六八年秋には『聖ペテルブルク報知』誌特派員の肩書きで、当時動乱状態にあったスペインのバルセロナに単身乗り込むのである。オーウエルの「カタロニア賛歌」やエンツェンスベルガーの「スペインの短い夏」にもあるように、カタロニア地方ではいままなおバクーニン主義の影響がつよいというが、おそらくそこにはメーチニコフの役割も影を落としているのであるまいか<sup>8</sup>。そのことを裏付けるために、私はバルセロナ大

学の図書館でメーチニコフの痕跡を探し求めたが、残念ながらそこには何も残されてはいなかった。

メーチニコフのこのスペイン行きが、単なる取材旅行にとどまらなかったことは、このとき彼がさるポーランドの革命組織の紹介状を持つていたことから明らかであろう。「スペインのすべての愛国者諸君に対し、われわれはガリバルディ麾下の参謀部付き大尉メーチニコフ氏を、勇敢なる戦士、諸国民の自由と独立の擁護者として紹介するものである」とそこには書かれていた<sup>9</sup>。半年のスペイン滞在の後、ジュネーブに戻ったメーチニコフは翌六九年の『祖国雑記』に「スペイン紀行」なる論文を七回に分けて載せている。

またほぼこれと同じ頃、メーチニコフはロシアにおける土着の革命思想の系譜にも強い関心を寄せるようになっていく。それは革命思想におけるナショナルな契機の重要性への着目と言い換えてもいい。ロシア史において従来あまり取り上げられることのなかったコサツク制度や、動乱時代における僭称者偽ドミートリイの意義、さらには分離派教徒の反国家的役割に焦点を当てることであつた。一八六八年にフランス語版『コーロル』（鐘）がゲルツェンによって発刊されると、「ルーシにおける国家の敵対者たち」という論文を連載する<sup>10</sup>。ここでメーチニコフが、ロシアの古称であるルーシを敢えて使ったことに注目したい。革命思想とは何も西欧からの借用ではなく、国家としてのロシアの歴史とは別の位相で連綿として受け継がれてきたものであることを、示したかったのであろう。そしてこうした国家とは別の、民衆史の発掘という方法は、メーチニコフが日本文明を論じる場合にも大いに発揮されることになる。

話がだいぶそれたが、大山巖と出会った時のメーチニコフは、こうした革命家としての経歴と、思想的遍歴をすでに経ていたことを示したかったからである。二人は翌日から日本語とフランス語の交換教授、いわゆる「ランカスター式相互教授」を開始する。それでは二人は具体的にどのような授業をしていたのか、このことが長いこと気にかかっていた。なぜなら大山の日本語は相当薩摩訛りがあったと思われるが、もし耳のいいメーチニコフがこれを丸暗記したとしたら、どうなるのか。

しかしそれが杞憂であることを立証するような一次資料が、こともあろうに数年前に数年前にわが国の国会図書館からでてきたのである。その憲政資料室には大山巖文書というアーカイブがあり、「欧州留学中の元帥の勉強」というファイルが収蔵されている。二十枚ほどのレポート用紙と数百枚の単語カードがそこには収められていた。見ると達筆なペン字でフランス語の文章がいくつも綴られている。ただすべての用紙に二つ折りされた痕があり、欄外に鉛筆書きで「二回終了」とか「完璧！」と書かれているのが気にかかった。そこで文章を丹念に読んでみると左側には確かにフランス語の文章が書かれているのだが、それに対応する右側には、驚いたことにその文章の和訳がフランス語綴りで書かれているではないか。わたしは一瞬目を疑ったが、これこそ二人の勉強のあとを裏付ける貴重な資料に間違いない。おそらくこれまでの大山の研究者たちは、フランス語が読めなかったのか、それともメーチニコフという存在そのものが視野に入っていないか、誰一人この資料を丹念に解読しようとするものがないか、ということだ。わたしは全例文をチェックしたが、最初のうちはごく単純な仏文

が、語順どおりに日本語訳されている。「ワレハ イルデアロウ ロンドンニ」といった具合である。おそらくメーチニコフがフランス語の例文を書き、ついでその意味を説明すると、大山が日本語訳を声に出す。それをメーチニコフはフランス語綴りで記してゆくというやり方をとつたに違いない。その証拠に、何箇所か聞き取りの過程で生じるようなミスが散見されるのだ。例えば正直がショウテイキと記されているといった具合。こうした調子で文章を何百かおぼえていけば、日本語の場合、あとは単語をおぼえるだけでかなり高度な会話ができるようになるであろう。ここからわかるように、大山は薩摩弁ではなく、おぼえたての江戸弁を教えていたのである。その証拠にこんなユーモラスな会話文も含まれている。「タダイマカシカラケエツタ」「サカナハアツタカ?」「サカナハハナハダスクノウ」などという例文が出てくるのである<sup>11</sup>。

この時大山はすでにフランス人のバゼーについてフランス語を学んでいたのだが、メーチニコフとのこの実践的な学習法に気をよくしたのか、それともメーチニコフの革命家としての生き様に惚れ込んだのか、二週間後にはもう「露人ノ宿所ニ転居セントシタルガ、下宿ノ家人ハ惜ミ留メル」と書いている。しかもこの頃から、大山はメーチニコフを師と仰いだのである。う、謝礼として月額二二〇フランも払っているのである。この頃メーチニコフは妻のオリガとその成人した娘のナーヂャと暮らしていた。定収入のない亡命者のメーチニコフは、ロシアの急進誌『事業』に毎号のように論文を発表していた。ある証言によると、彼は来客のおしゃべりを聞きながら、食卓の片隅で論文を書き続けていたという<sup>12</sup>。そればかりではない。これ

も生活費を稼ぐためであろう、その頃ジュネーブの商工会議所で彼は公開講座を開き、なんとロシア語訳が出たばかりのマルクスの『資本論』（『資本論』のロシア語訳は一八七二年、ナロードニキのダニエリソンの訳で出ている）について講義していたというのである。この講義を聴講したマクラーコフの回想がモスクワのアーカイブに残されている。終生メーチニコフを敬愛（いや時に恋愛感情すらそこには感じられる）したこの女流作家となる人物は、その頃メーチニコフ家に下宿するようになり、メーチニコフの仕事ぶりや、大山との交換教授の様子をまぢかに見ていた数少ない生き証人である。

「ひどく忙しかったにもかかわらず、（質問に答えてくれる）彼は優しく、忍耐強かった。彼は文字通り仕事に追われていた。論文を書く以外に、家庭教師をし、また彼自身も日本語の授業を受けていた。週に何度か日本人の教師たちがやってきて、講読や会話の勉強をしていた。……日本人の教師たちは彼の日本語の急速な進歩を絶えず絶賛していた。

込み入った文字、それも横ではなく縦に配列された文字が書かれた彼のノートを憶えている。……レフ・イリイチは、我慢強く次々にそれらの文字を描き出し、中心的な日本人オオヤマの授業の準備を熱心にやっていた。それが終わると、ノートを脇に片付け、眼鏡を額のうえに上げて、こう尋ねるのだった。『さてお嬢さん、前回の講義のどこがお解かりにならなかったかな？』<sup>13</sup>

この証言は貴重である。この当時メーチニコフにはロシア秘密警察の密偵の尾行がついていたから、大山ら日本人留学生の動向もロシア内務省には筒抜けだったはずである。大山もメー

チニコフが亡命の革命家であることは知っている。この当時、スイス人から「政府の武官であるのに、有名な革命家に勉強を習つてもいいのか」と糺された大山は、「彼らは政治上で志を得なく、海外に亡命しているのに過ぎない。かれらが成功していれば、今の政府の要人に勉強を習うだけだ」と胸を張って答えたという。維新革命を生き抜いた薩摩隼人の面目躍如たるところだ。しかもメーチニコフの家には、複数の日本人が出入りしていたというのだ。そしてこうした日本人留学生との日常的な付き合いが第二の奇跡の出会いを用意するのである。

急遽帰国の途に着いた岩倉使節団の副使木戸孝允との出会いもその一つであろう。明治六（一八七三）年五月二十二日、木戸は日記にこうしたためた。

「曇、十二字市街ヲ散歩、今日、□□ノ祭日ニテ皆日中ヨリ戸ヲ鎖セリ、一字帰寓、鍋島華族来訪、中井巴里ニ至ル、大山モ同行ナリ。三字ステーションニ至リ送ル、鍋島一建モ同時伊太利亞ニ発ス。帰途太田ノ来尋スルニ逢フ、一応帰寓、直二同車カランサコネット云フ処ニ至ル、山水ヲ眺望ス、其ヨリ又江ヲ渡リハークニ至リ五字帰宿、認食、輿太田メツチャコフノ家ヲ訪（メツチャコフハ曾テガリバルヂート共ニ伊太利亞ニテ戦争ヲナシ一足ヲ失セリ、大山彼ヲ師トシ仏ヲ学ベリ。不図今夕ステーションニテ面会シ相約ス）談話十字ニ至ル……」（『木戸孝允日記』）

あの桂小五郎（木戸）までがメーチニコフの家に行つていたので。しかも翌日もまたメーチニコフと二時間ばかり、ホテルの前を散歩し、談笑しているのである。通訳などいないからメーチニコフはおぼえたての日本語で話したのであろう。この木戸の記述に出会ったのは『回想の明治維新』（岩波文庫）の

注を作成している時だった。「日本における二年間の勤務の思い出」というメーチニコフの回想が、日刊紙『ロシア報知』に十七回にわたって不定期に連載されていることをたまたま知ったわたしは、急遽、当時ペテルブルク滞在中のスラブ研究センターの出かず子さんにお願ひし、マイクロフィルムを送っていたのだった。そこにはわたしが長い間夢想していた驚くべき出会いが記されていたのである。それによるとメーチニコフは、かの岩倉使節団とも出会い、団員たちと親交を深めていたというのである。

「だが熱意がそれにうち勝つて、わたしは陸軍武官としてのビスマルクに謁見したことまでであるこの善良な日本の将軍と、一種のランカスター式相互教授の約束を取り付けることに成功した。その結果、半年もするとわたしは、パリでアカデミックにやっていたら、四年はかかるであろうところの、日本語の口語、文語の基礎知識を習得できたのである。一八七三年に世界各国の歴訪を終えた日本の使節団がスイスに姿を見せたとき、わたしは彼らとその母国語で話し、文通ができただけでなく、ジュネーブの有名な“Hôtel de Bergues”のハットを、「フォテル・デ・ベルグス」などと発音する彼らのフランス語通訳の言うことまで理解できるまでになっていた」（二五―二六）。

日本側の資料にもこの時の出会いを記したものがあつた。使節団の随員高崎正風（豊麿）の「在外日記」にはこんな記述がある。「六月十七日（土）、大山案内シテ露西亜人メリチコフヲ訪フ。此人君主専治ノ政ヲ悪シ、自国ヲ去テ、ガリバルヂノ共和党ニ皈シ、一方ノ将官ヲ得テ、千八百六十年ノ戦争ニ出テ、足部ヲ射ラレテ、跛トナリ、ガリバルヂ退キシ後、此地（ジュネーブ）

ニ留止セリト云フ。為人敏捷、英、仏、日耳曼、伊太利、西班牙ノ語ヲ能クシ、又巴里西ナルデランドロニーの門ニ入テ、日本学ヲ学ビ、少シク談話ヲナス。音調甚好シ、実ニ一奇人ナリ」（高崎正風先生伝記）

この岩倉使節団、とりわけ薩摩出身者たちとの親交がメーチニコフの日本行きをいよいよ確実なものにしていくのである。その年の暮れ、彼はなんと、かの西郷隆盛から招請状を受け取るのである。江戸に薩摩藩子弟のための私学校を設立するというのがその任務であつた。

かくて翌一八七四年の四月、メーチニコフは大山の見送りを受けて、マルセーユから横浜に向けて旅立ったのである。懐中には西郷に宛てた大山の分厚い手紙が収められていた。宿舎は西郷の実弟従道（つぐみち）の新築なつた別邸となつていた。

「わたしは新しい皇都（江戸または東京）で、薩摩藩の子弟のための学校を開設するために日本へ招聘されたのだつた。この藩の出身者こそ、この国が欧化主義と政治的進歩の道に最終的に向かう転換点になつたところの、あの六八年革命において、主導的役割を演じた人たちにほかならない。……江戸における薩摩人居住区の首領にして精神的支柱だつたのは、陸軍卿のサイゴウだつた。わたしはサイゴウを個人的には知らないが、彼こそは事実上、わたしの唯一の上司にしてパトロンとなるはずだつた。だが岩倉と大久保の指導による政策方針に不満を持つたサイゴウは、わたしが横浜につく少し前に、陸軍卿を辞任し、日本の最南端に位置する鹿児島へと去つてしまつていた」（六二）。

メーチニコフの乗つたヴォルガ号の航海は五十日におよん



だという。横浜の開港資料館に残る英字新聞の乗員名簿（ここでもメーチニコフの名前はメツチンクフと誤記されていた）から彼の寄港が五月二七日と特定できたので、彼がマルセーユを出航したのは四月七日ごろと推定される。この船には日本政府から寄港命令を受けた十七名の留学生が乗っていた。ところが彼らのヨーロッパ文明への素朴な盲信ぶりを茶化するような記述はあつても、この長い航海の間中、彼らと付き合つたという記述が全くない。少なくとも記録するに値するような人物が一人もいなかったということだろう。そんな中でメーチニコフが胸襟を開いて語り合つた人物が一人いた。「若き日本のフィガロ」と形容されたりヨンから帰国する商人のゲンジロウである。昨年「シルク」という映画が話題になつたが、当時は日本の良質の生糸、とりわけ蚕卵紙が欧州では高値で取引されており、このゲンジロウ（小島商店の創始者小島源次郎か？）もその商談でフランスに渡り、そこで山師に引っかけり、日本へ帰国するところであつた。

「このゲンジロウこそは、わたしにとつてこの上なく貴重な話し相手、道連れであつた。振り分け荷物を肩にかけ、青い木綿の着物を腰のあたりまでまくりあげたいでたちで、彼は日本中をほとんどくまなく歩きまわっていた。彼の口から、わたしは日本の実生活の細々した事柄や特徴を知らされた。そういつたことは、どんな書物にも書かれていなかったし、パリの教室や遊歩道を徘徊していた日本のサムライや、遠く日出る国でナポレオン流の進歩と中央集権化をはかろうとしていた彼らの上司たちには、てんでわかつていなかったことである」（四〇）。この文章には維新革命をなしたとげた日本に対するメーチニコフ

の基本的な視座がはつきりと出ている。ここでいう「ナポレオン流の進歩……」とは大久保利通の政治路線を指している。アナキストであるメーチニコフには岩倉使節団のフランス歴訪中にフランス第二帝政の研究をしていたという内務卿大久保の、国家主義的傾向は座視できないものだったのだろう。おそらくこのあたりの事情はジュネーブで会談した木戸や、日頃顔を合わせていた大山とその仲間たち、あるいは使節団の随員で親交があつたと思われる田中光顕や田中不二磨から耳にしていたのであろう。

「スイスにあらわれる以前に、それまで共同歩調をとつてきた木戸と大久保は、たがいに異なつた政治的色彩で色分けされるまでになつていた。フランスの中央集権制に惚れこんだ大久保は、パリではとくとくとしてセーヌ県の複雑な機構と出版に関するナポレオン法典の研究にいそしんだ。これに対し木戸は、日本議会の召集を夢み、ほどなくすばらしい炯眼をもつてつぎのことを洞察した。すなわち長期にわたる共同体制度をそなえたスイスこそ、領土の狭さにもかかわらず、多様な地域的、歴史的特殊性をもつた日本のような国の為政者にとつては、格好の政治的教訓にならうと。……」（二八―二九）

ここには六八年に『祖国雑記』に二度にわたり「スイス論」を発表していたメーチニコフの影響が感じられる<sup>14</sup>。そもそもアナキストのワイトリングがその思想の論拠にしたのがスイスの時計職人たちの協同組合であつたように、小邦連合体であるスイスは、メーチニコフが理想とする政治形態に近かつたのであろう。したがって、日本にはこういう発展の道もあると木戸に説いたことは十分予測されるのである。

また知識人よりも庶民であるゲンジロウにかぎりない信頼をよせるメーチニコフのナロードニキ精神は、その日本観察にも存分に発揮されることになるであろう。かつてメーチニコフは、風刺作家で『祖国雑記』誌編集長であったサルトウイコフ・シCHEDリンに宛てて明治維新をめぐる自伝的小説を書きたいという趣旨の手紙を送り、「日本に行く前から、その国の進歩的活動家と親交がありましたので、より深く日本の社会生活に入り込むことができました」<sup>15</sup>と書いているのも決して誇張ではなかった。また出発直前にナロードニキ系の雑誌『事業』の編集長ブラゴスヴェートロフからメーチニコフはこんな手紙を貰っていたのだった。

「……日本ではすべてが新たに改造されており、こうした日本の完全な覚醒は、ヨーロッパ人の観察にとつてすこぶる興味深いものです。『事業』のためには、さしあたり日本が近年達成した国内諸改革の概観を与えてくれれば結構です。それらの諸改革が見事に総括され、説明されれば、われわれにとつても教訓的なものとなりましょう。次に日本と東洋との関係が別の論文の対象となるでしょう」(二八七三年十二月十一日付)<sup>16</sup>。メーチニコフの日本論はこうした要請にもこたえるべく書かれることになる。

## 二、土着的革命としての明治維新

横浜に着いたメーチニコフには出迎えの者が誰もいなかった。それもそのはずで西郷隆盛は征韓論に破れ、鹿児島に下野

していたし、弟の従道は台湾出兵の総司令官として長崎を発つた後だったのだ。またすでに触れた薩摩出身で左院出仕の高崎正風は、薩摩藩の学校計画の頓挫と文部省雇い入れに変更した旨の電報をジュネーブに送っており、到着は二ヶ月以上先だと考えていたのである。郵便事情が悪かったこの時代にはこうした行き違いはまま起こったであろうが、そこには日本行きを急いだメーチニコフの性急さと、西郷隆盛にたいする大山巖の全幅の信頼があつたと思われる。

メーチニコフは日本行きを決心してからというものの、欧米で入手できる限りの日本論に眼を通す。古いところではケンペル、クラブプロート、シーボルト、ホフマン、又新しいところではリンダウ、ヒュブネル、ブスケ、デイクソン。それらを読んでみても、勝利した攘夷派が、一八〇度方針を転換して、西欧的な改革に突っ走った理由が理解できなかった。

「だが、全くもつて不可解なのは、この勝利した反動派が、政治の舞台に登場するや、彼らの先行者たちですらよもや夢にも見なかった(いや見たくもなかったであろう)ことを、第一歩目から画策しはじめたということだった。すなわち彼らは日本そのものをヨーロッパ風の国家に仕立て上げようとしたのである。事実ヨーロッパのジャーナリズムも、アレクサンダー大王流にこのゴルディオスの結び目をほぐく(快刀乱麻のたとえ)ことに躍起となり、日出る国の自由主義的改造の原因を、若き新帝陸人の意思によるものと考えた。言うならば彼らはこの皇帝のなかに、ピョートル大帝を見ていたわけである」(六五―六六)。

たしかに明治維新をになった指導層のなかにも、ピョートル

大帝にたいする賛美はあつたようで、当時発行された錦絵には大帝の肖像があり、また大帝の伝記まで維新直後に出版されているのである。

しかしすでに来日以前にロシアの歴史を国家の観点ではなく、それと対抗関係にある民衆の視点から描きだしていたメーチニコフは、そうした「上からの改革」という紋切り型の理解で満足できるはずはなかった。このような理解が出てくる根底には、西欧のエゴセントリズムがあるとメーチニコフは喝破するのである。「われわれは一般に、日本の現実に対する欧米の介入の意義をあまりに過大視しすぎる傾向があるということだ。ところが実際には、六十年代のこの国の改革運動（それは今なお終息せず、最終的なたちをみていない）は、主として純粹に土着的な所産、つまりそれに先行する動きについてかのケンペル、クラブロート、シーボルト、ホフマン……の著作が余りに不十分かつ不正確に伝えているところの歴史的ドラマのエピローグだったのである」（六六―六七）。

また別の箇所でもメーチニコフはこう断じている。「旅行者や投機家は言わずもがな、この遠い国の歴史や風俗を、現地で原典に当たって研究した少数の専門家もふくめ、一般にヨーロッパ人というものは、外からの強制的な開国が日本におよぼした意味を誇大視する傾向が強すぎる。かといって逆の極端に走り、まるでこの極東の閉ざされた国への欧米人の出現など、まったく取るに足らぬ偶然的の出来事にすぎなかったなどとわたしは主張しているのではない。ただ外国の分艦隊や宣教師、貿易商らの出現は、外からのいかなる干渉とも無関係な、純粹に土着的な諸事件と密接に絡みあつた重大なエピソードだつ

たということ、わたしは主張しておきたいのである」（二八〇―一八二）。

この明治維新の土着性という基本的な視座が定まっているところに、メーチニコフの日本論、とりわけ明治維新論の先駆性がある。ここからはそれに先行する鎖国下の江戸期の社会的成熟への着目と、それに対比される文明という名の野蛮としての西欧諸国の横暴さの暴露がおのずから出てくる。西郷従道の別邸に寄宿するはずが、主の不在でそれもかなわなくなつたメーチニコフは、外国語学校の新学期（この頃は九月）が始まるまでのおよそ三ヶ月を、築地の外国人居留地で送ることになる。彼自身回想するように、そこにはグロテスクなまでに粗暴で、野蛮で、無教養な文明の子らが跋扈していたようである。しかしメーチニコフはそうした西欧文明の恥部を見ても、別段驚嘆する風でもない。なぜなら文明という名の野蛮は、西欧にとつての境界人としてのロシア人、それもパスポートを持たない亡命者、西欧も含め支配体制への批判的立場を持つ革命家としてのメーチニコフにとつて、いやというほど体験済みのことだつたから。

日本からの帰国直後に、『事業』誌に発表した「文明の裏面」で、メーチニコフは一八七八年のパリ万国博覧会で浮かれ騒ぐ西欧文明社会の一人よがりやを苦々しく批判する。彼によると、この万博の人類学パビリオンには、未開人の骨格標本などが展示されていたようだが、それを見たメーチニコフは、それではなぜ、文明社会の底辺に暮らす労働者貧民の退化した脳をも展示しないのかと迫る<sup>17</sup>。かつて六十年代にロンドンで万博を見物したドストエフスキーが、そこに展示された近代建築「水

晶宮」に衝撃を受け、そこから「二二が四は死だ」という有名な公式を引き出した（『地下室の手記』）ように、ヨーロッパの辺境であるロシア人には、この文明の成果を無批判に誇る万国博覧会は、異様なもの、グロテスクなものと思われたようである。

ついでながらこのパリ万博に日本側の代表として出席したのが、哲学者九鬼周三の父親で、当時文部少輔（局長に相当）だった九鬼隆一である。そのとき九鬼の通訳として随行したのは、東京外国語学校仏語教授で後に四高校長などを歴任する中川元であった。なぜこんなことに触れるかというと、この時九鬼はメーチニコフの依頼で、日本の古代文学に関する文献を多数届けてくれたからである。この当時フランス語の大著『日本帝国』を執筆中だったメーチニコフは『古事記』、『日本書紀』等に関する文献が不足している旨を九鬼に伝えていたようである。『東京外国語大学史』の資料編を編纂中に、東京大学の前身である開成学校から数度にわたってメーチニコフが招聘を受けていることを証す一次資料が多数出てきたが、この件で九鬼が一枚かんでいたとは十分予想される。いやそれどころかすでに言及した田中不二麿は当時文部省のナンバー2であり、文部卿木戸直々の推挽で外語に赴任したメーチニコフのことはとかく話題に上っていたと思われる。さらにいえばこの数年後に田中の子息で地理学者の田中阿歌麿が地理学を学ぶべくスイスのクラランにメーチニコフを訪問しているのもこうした親交を物語っているだろう<sup>18</sup>。ちなみにこの地理学者田中阿歌麿の夫人が服飾家の田中千代である。そしてメーチニコフもまた、『日本帝国』の補遺でわざわざ九鬼のことを「若き日本のハムレット」と形容し、謝辞を記している<sup>19</sup>。なお最近日本の芸術

教育に果たした九鬼の功績が、岡倉天心とのからみで再評価され始めている。

メーチニコフの日本史の知識は頼山陽の『日本外史』や河村貞山の『皇朝千字文』によっていると思われる。ちなみに後者は意外にも当時ジュネーブでイタリア人トウレットチーニによってフランス語訳がでていたという。東洋学関係の基本文献の翻訳を手がけていた彼の出版社「晩採草」<sup>20</sup>からは、メーチニコフの『古事記』の仏訳<sup>20</sup>、さらには前出の七百ページにも及ぶ彼のフランス語の大著『日本帝国』が出ることになる。

それはさておき、まずは欧米人の先入見を示す例として家康による鎖国政策が取り上げられる。「日本の鎖国とは、あくまでも政治のなせるわざであつて、民衆的なものではなかつた」とメーチニコフは断ずる。ここでメーチニコフが政治と民衆を峻別していることは重要である。ここでは政治とは国家と国家と換えてもいい。およそ無政府主義者のメーチニコフは国家という制度そのものを認めない。あるいはその国家が発する政策や法律が、民衆生活を律しているといった紋切り型の史観は持たない。鎖国政策がカトリック宣教師の侵略性に対する警戒心からはじまったことだとしながらも、鎖国下の日本人が欧米の知識を貪欲に吸収していた事実を彼は見逃さないのである。その例として、オランダからの「医学、自然科学、製図法、時計術」の撰取や、ウィリアム・アダムス（三浦安針）の厚遇の例をあげる。さらに幕末になると、西欧文明の優越性を説き、それを肌で知ろうとするものが出てきたとして、吉田松陰や佐久間象山に注目し、こうした民のレベルでの欧米への接近の志向が出てきた時から明治維新は始まったとされるのである。それは磐

石を誇った徳川幕藩体制の屋台骨が揺るぎ始めたことと機を一にしている。そのことを示す事件として、被差別部落民を率いて反乱を起こした大塩平八郎の例を、メーチニコフは取り上げるのである。

「日本には、ヨーロッパ的意味での都市住民は、これまでいかなかった。この国でプロレタリアートの役割を担ったのは、エタやヒンのような虐げられた身分の人たちだった。そして彼らもまた、自分たちの政治、社会的立場が時代の精神にそぐわないものだということに、気づきはじめていた。だからこそ天保時代に、大塩なる人物は、武器を手にもずからの人権の承認を要求する数千人のこうした虐げられた人々をその指揮下に結集することができたのだ」(二八六)。

ここでメーチニコフが大塩平八郎の乱に着目したことは、重要である。この乱のことはメーチニコフが来日した頃には、公の歴史の表面には登場してこなかったはずである。だとしたら誰がこの民衆反乱のことを、メーチニコフに示唆したのか。ここで浮かび上がってくるのが中江兆民の存在である。メーチニコフが着任した翌年、明治八年二月に、中江篤介すなわち兆民が、東京外国語学校の校長として現れるのである。メーチニコフのアーカイブには、パリ時代の兆民の親友であった飯塚納の名刺が残されている。このアーカイブにはほかに田中光顕(一八四三—一九三九、土佐出身、のちの宮内相)の名刺が残っているが、これは岩倉使節団の一員として、ジュネーブで出会った時のものである。ついでながらメーチニコフはいわゆる岩倉使節団のヘソクリ事件にも言及しているが、この情報源は使節団の会計係をつとめた田中光顕あたりかと思わ

れる。田中彰氏の研究によれば、使節団の多くの者が、旅費と日当を節約し、利殖目的でアメリカの銀行ボウルズ商会に総額十二万五千円を預金していたのであった。こんな使節団の恥とも言うべき事件をメーチニコフが知っていたということ自体、彼と使節団随員との親密度を示すといえよう。

一見不動に見える徳川時代におけるダイナミックな内的変化と社会的成熟を見ないと、幕末から明治維新へと向かう日本の動きは理解できないことにメーチニコフは気づいていたのである。そうした内的動きを担ったものとして、彼は下級武士の存在に注目する。

「日本でフランスの第三身分にあたる役割を果たしたのは、大名につかえる小貴族つまりサムライと、將軍の親衛隊ともいうべき旗本(旗の下ほどの意)である。小貴族層のこれら二つの集団のあいだには敵意と反目があった。おまけに動乱時代が来ると予想した大名は、当然ながら、あまり多くの下級武士を自分のまわりに置くことを惧れた。これら下級武士たちの経済状態は、その数が増えるにしたがい、ますます悪化していったからである。……だが医者、通訳、学者、芸術家などが出てくるのも、これら下級武士の中からのものだ。彼らのうちの最良の人々は、日出ずる国で唯一の公認の学問だった中国式の古典主義の無益さをとくに悟っていた。こうして十八世紀には早くもさまざまな藩で、おもに若者からなる秘密結社が組織され、長崎湾の出島のオランダ人居留地を経由して、ヨーロッパの学術書、とりわけ天文学と医学にかんする書物を手しはじめ」(二八六—二八七)。しかも当の將軍自身(吉宗のこと)が、天文学や自然科学に関心を寄せていたことまで強調されてい

る。

それではなぜ、黒船出現による外圧を明治維新の起爆剤と捉えるような観点が、欧米では支配的なのであろうか。ここにも欧米のエゴセントリズムがあるとメーチニコフは指摘する。アジア的停滞というのがそこから出てくるレットテルである。メーチニコフ自身、こうした先入主と無縁ではなかったであろう。そうであるが故にパリ・コミューンの敗北後に極東の日本で革命が起こったことに驚嘆した。もちろん彼の場合、早くからアジアの言語を学んだことからわかるように、アジアを内在的に理解しようという姿勢はあつたし、その後中近東地域を半年放浪してアジアの文明ともじかに接してきたから、通常のヨーロッパ人に見受けられるような東洋に対する偏見を免れていたことは確かだが……。少し長くなるが、明治維新の報に接した時のメーチニコフの心境を彼自身の言葉で紹介しておこう。

「何の定職もないロシアの漂泊者にとつて、一八七〇年代初頭のヨーロッパに暮らすことはつらかつた。行くべき地で、うちに秘めた計画の実現への希望を無期延期せねばならぬと思ひ知らされる毎日だつた。また仮にそうした計画の一部が実現され始めたかに見えても、そこにはなにかしら異質なものが混じつており、妙によそよそしく、憂鬱でうそ寒い感じが漂ってくるのだつた。気分を一新し、どこか遠い遠いところにさまよいいで、まったく新しい印象や観察で、自分の精神世界を豊かにすることが必要だつた。まさにそんな時である、ヨーロッパにたれこめる長い悪天候の地平線のかなた、はるか東方で、思いがけずも明るい光が輝きはじめたのである。われわれがめざめることのない因循と停滞の砦とみなすことに慣れていた

国々、中国と日本がもぞもぞと動きだし、めぎめたかと思うと、予想もしなかつた勢いでみずからすすんで、「白人文明」を迎え入れはじめたのである。ムラヴィヨーフ・アムールスキイ伯のコザック警護隊、アメリカのペリー准将の大砲、プチャーチン伯の権謀術数の力をかりて「白人文明」がいわばごり押しに押し入つたことなど彼らにとつてはどうでもよかつた。

われわれの想像の中では謎の国、特別注意するにもあたらない中国の付属物とみなされてきた日本が、その第一歩目から新しい世界できわめて果敢に前面にうって出、その自然の美しさと豪華さばかりか、幾世紀にもわたつて蓄積されたその文化によつて、招かれざる客たちを驚嘆させたのである。といつても無論、日本の文化は、近年のヨーロッパの文明のレベルに達していたわけではないが、そのかわりに都市および農村の住民の最下層にまであまねく浸透していたのだつた。この地ではじまつた運動が、軽佻浮薄な熱中のなせるわざとか、全能の専制者の気まぐれの所産でなかつたことは、新聞によつて知らされる諸事件がはつきりと物語つていた。つまり昨日までほとんど食人種の野蛮と全裸状態でのほほんとしてきながら、今日は運命のいたずらでたまたま漂着したヨーロッパの冒険家から、文明のガラクタや縁飾りのついたズボンを借用するといったたぐいのものではなかつたのである。

麻痺状態からめぎめ、新生活へと雄々しく乗りだした国民全体の姿を目にするのは、诗情あふれる人跡未踏の鬱蒼たる密林や砂漠にもまして、気分を一新させてくれるものである。そして当時の日本には、こうした感動的で清新なる光景を発見できるにちがいないとわたしは確信するのだつた……」（一九一

ここには東洋への単なるエキゾチズムでもアヴァンチュリズムでもない客観的な現状認識がある。物質文明という意味での西欧文明の圧倒的な高さを認めつつも、文化的な豊饒さ、その浸透度という意味では日本はもしかすると西欧をはるかに凌駕するかもしれないという予感がそこには感じられる。しかも政治・社会のダイナミズムという点では、停滞というレッテルは西欧にこそ貼られるべきもので、躍動的な日本をとおして見るとき、それまでの後進的・停滞的アジア対先進的・革新的西欧という支配図式は逆転されるとメーチニコフは直感するのである。

繰り返しをおそれずにいえば、こうしたアジア認識が出てくる背景には、一八四〇年代にはじまる、ロシア国内の西欧派・スラヴ派論争、さらにはその総合をめざしたゲルツェンの西欧批判と新たなナロードの発見という思想的系譜が垣間見られるのである。これは次章でも触れるが、ロシアにおける西欧批判の根底には、ゲルツェンの用語を用いればメシチャンストヴォが瀰漫しているということになる。町人根性、小市民性、プチブル性なども訳されるこの用語で、ゲルツェンが強調したかったのは、それまで理想化して見ていた西欧市民社会が、実は画一化、均等化、没個性という落とし穴に陥っていることであった。個の確立とは名ばかりで、各人が流行を追い、自由に行動しているようで実は無自覚に画一化への道にはまり込んでいることを、二月革命後のフランスの情況をつぶさに観察したゲルツェンは洞察したのである。ゲルツェンにはじまるナロードニキ思想の根底では、社会主義とは西欧がなしえなかつ

た個人主義、個の自由を十全に実現するものと考えられていた。であるがゆえに彼らは権力をめざす政治闘争を排し、社会の内的な変革を求めたのであった。なぜなら政治闘争においては個人は容易に手段に、肉弾に化してしまふからである。しかもそこでいう個人とは、数量的に捉えられたアトムとしての個人ではなく、時々刻々千変万化する顔をもった個人、生身の個人、つまりロシア語のリーチノスチという言葉で表される個人である。ゲルツェンの直系の弟子であるメーチニコフが日本を観察するさいの照準となつたのも、こうした意味での個人であった。彼の明治維新論がいまなお斬新に映るのは、こうしたリーチノスチがうごめき、躍動しているからである。こうした要素も含め、メーチニコフは明治維新を「歴史上われわれが知りうるものとも完全かつラジカルな革命<sup>ベレクアロト</sup>」と呼んだのだ<sup>21</sup>。

その後の日本がたどつた道を知っているわれわれには、メーチニコフのあまりにも高い明治維新評価は受け入れにくいかもしれない。しかしそれまでにロシアだけでなく、イタリア、フランス、スペイン、モンテネグロの革命運動、民族解放闘争に参加した経歴を持つ現役の革命家の言葉であることを、ここでは忘れてはならないだろう。メーチニコフは何も明治維新を手放しで絶賛したわけではない。すでに述べたが、大久保利通による中央集権化、軍国主義化に彼は危惧を表明していた。それをも視野に入れてこう予言するのだった。

「日本のような国を、その土台から突き動かした進歩的潮流こそが重要なのである。ひとたび新たな道を選択した以上、日本はもはやこの新たな道から逃れることはできない。それが論理の必然というものなのだ。ことの正否は別にして、日本は早

晩、過去との有機的連関を断ち切り、この必然的道筋に従わねばならなくなるであろう。はたして日本が、残る東洋の再生の先頭に立つことになるか否か？——この問いにはひとり時間だけが答えてくれよう。だがそれはさておき、文明諸国はもはや日本を無視することはできないし、日本が現在および未来において果たす意義を軽視しえぬばかりか、そうすべきでもない。

日本を研究し、日本と多少とも理性的な関係を維持することが、近隣諸国にとつて特に必要不可欠となつてきている。一つの社会内の個々の成員の連帯と同様、人類という一大家族のなかでの、諸国民間の連帯が、今日では政治、社会、精神の運動の主要な指導原理となつていることを忘れてはなるまい」（Ⅱ、一八一—一九）。

『事業』誌の編集長ブラゴスヴェートロフの依頼を待つまでもなく、メーチニコフはアジア、東洋における日本の位置、あるいはそこで果たす日本の役割にも目配りを忘れない。さらに西洋と東洋を対置するだけでなく、人類的な連帯をも視野におさめていたことは特筆されるべきであろう。なぜ残る東洋との関係が危惧されるかというと、明治日本が欧米コンプレックスと、それとは対照的なアジアへの優越意識を持つていることを察知したからである。「手短かに言うと、歴史的経験によつて、日本は極東諸国に対するみずからの立場の強さと優位性を熟知しており、そのためにそれらの国との接触に際しては、完全なる独立性どころか、主権すら持つていたのである」。その例として、メーチニコフは元寇や秀吉の朝鮮出兵を挙げるが、目の前で起こっている事件として、征台の役に注目しているの

は興味深い。一八七二（明治四）年に、台湾に漂着した琉球島民が現地住民に殺戮されたことに端を発し、一八七四（明治七）年四月に西郷従道が独断で台湾に出兵したこの事件は、欧米諸国、とりわけイギリスの反対を押し切つて決行されたものであり、士族の不満を外にそらすことが目的であった。すでに述べたように、西郷従道の別邸に下宿するはずだったメーチニコフにしてみれば、来日直前に起こつたこの事件には注目しないわけには行かなかつたであろう。

また同じ年の二月に江藤新平らによつて起こされた佐賀の乱の鎮圧と晒し首という残忍な処置は士族の不満を増幅する結果になつた。そしてこれが台湾出兵の引き金にもなるのであるが、メーチニコフが注目するのはこうした事件の推移だけではない。「むしろこの戦争のもつとも暗い面は、これによつて薩摩派の中央集権的志向が優位に立つてしまった」ことであると。とりわけ内務卿大久保利通による県令制度や徴兵制度の導入によつて薩摩藩出身者を中心とする全国支配がすすみ、讒謗律、新聞紙条例の制定によつて言論が封殺されていくことにメーチニコフは早くも警鐘を鳴らしたのである。またこの時期、朝鮮海域でも江華島事件という日本側による挑発事件が起こつていのように、新生日本は残るアジアにとつて脅威となる予兆がすでに見られていた。

日本が欧米コンプレックスを持つているからといって、すべてにおいて欧米諸国の要求を唯々諾々と呑んでいたわけではないことを示す事件として、メーチニコフは一八七二（明治五年）のマリア・ルース号事件について詳述しているのだが、これについては民主的な日本の政治、社会風土をあつかう次章でも



う一度立ち返ることにする。

### 三、日本の政治・社会風土の民主的性格

デモクラシーとは西欧の占有物であると思われるが、ちであるが、メーチニコフの目には維新直後の江戸こそが言葉のまっただき意味でのデモクラシーを実現している社会と映ったのだった。

「何はさておき、ヨーロッパ人であるわたしがもつとも驚いたのは、日本の生活の持つきわめて民主的な体制であつた。モングルのな東洋のこの僻遠の一隅にそんなものがあるうなどとは予想もしていなかつた。いやそれどころか、そうした体制はわたしが日本について読んだものや、自分の目でみた多くの事例ともひどく矛盾しているのだつた」(Ⅱ、九一)。

おそらく明治初年の日本には、内乱を抜けた後の活気が社会全体にみなぎっていたのであろう。この場合重要なのはメーチニコフがデモクラシーを何か制度として捉えるのではなく、まさに原義どおり「民の力」として理解していたことである。維新政府の重鎮たちとも面識があつたにもかかわらず、デモクラシーの程度を測る尺度は、あくまでも一介の庶民たちであつたところは、いかにもナロードニキらしい。

すでに述べたように、かつてアレクサンドル・ゲルツェンは、亡命先のパリでブルジョアたちのプチブル性を鋭く見抜き、それをメシチャンストヴォと名づけ、警鐘を鳴らした。彼の思想的系譜を引く左翼エスエル系の批評家イワノフ・ラズムニク

はその名著『ロシア社会思想史』の序文でインテリゲンツィアの対立概念としてこのメシチャンストヴォを用い、両者は脱階級的、脱階層的な概念であると規定した<sup>22</sup>。たとえ反体制を唱える左翼としてこれを免れるものではないことを、これによつて示したかつたのだ。ゲルツェンがパリ市民のメシチャンストヴォを喝破したのは、劇場だつたが、メーチニコフが日本のデモクラシーを最初に体感するのも芝居小屋であつた。

横浜に着いた翌日、自分の立場がどうなつていのかわからなかつた彼は、ゲンジロウの止めるのも聞かず、横浜駅から汽車に乗り、旧知の高崎正風(彼はこの直後、大久保利通に随行して北京に行つていゝ)の屋敷を訪れ(ここでも政府高官の住まいの質素さに驚いている)、薩摩藩の学校計画の頓挫を聞かされ、木戸孝允の計らいでこともあろうに官立学校の教授に推挙されたことを知るのであつた。アナーキストのメーチニコフにしてみれば、これは予想もしていなかつたことだつたようである。

「二服した人足たちが、わたしを再び芝居小屋へと送り届けてくれた時には、もう夕闇が迫つていた。こうして気がついてみると、わたしはいつのまにか、日本の聖なるミカド陛下に仕える役人になつていたのであつた。ちやうどモリエール喜劇のジュールダン氏が、そのなんたるかさえ知らずに作家になつてしまつたように……」(二三八)。

ここでいう芝居小屋とは、築地にあつた沢村座のことで、この一座の歌舞伎の様子をメーチニコフはこんな風に描いていゝる。

「午後の陽光が、観客ですし詰めの中のホールに、とてもやわらかくさし込んでいた。うす暗がりに目が慣れるまで、わたしは

大群衆の一人一人の人影も顔も識別できないほどだった。日本中どこでも感じたことだが、ここに集まっている群衆もじつに民主的な印象を与えるのだった。一目見ただけで、誰もが実際に芝居を観るために来ているのであって、自分を見せるためでないことは歴然としていた。だからこそ、彼らは取り立てて普段着を着換える必要も感じないのである。多くの女性客は、燃えるような切長の目を、舞台上に釘付けにしたまま、何の気取りもなく着物の胸をはだけ、赤児に乳を含ませている。男性客ともつと無遠慮で、しばしば素裸になつてしまい、その浅黒い身体には、これ以上脱ぐわけにはいかぬ下帯、つまりイチジクの葉の代用ともいえるべき白い手ぬぐいを紐で腰に巻きつけただけの姿になつてしまう。……なのにそこにはなんの混乱も押し合いもなかつた。ホール中見わたしても、ヨーロッパ風の不恰好な帽子と制服を着こみ、長い棒を小脇にかかえた巡査はたつた一人しかいないにもかかわらず……。それどころか、その巡査までもが、見たところ舞台上演じられている芝居に全く無我夢中のようにだつた」(一一一—一二二)。しかもこの時の演目が「桜橋の庄屋」、つまり佐倉宗吾の話であつたというのは、できすぎのようだが、ナロードニキ系の新聞に載せるには農民一揆をテーマにしたこの芝居は格好の素材であつたらう。歌舞伎は最良の日本語の学校とメーチニコフは呼んでいるから、歌舞伎特有のゆつくりした台詞は来日したばかりの彼の耳にはさぞ心地よく響いたのであろう。

ここで重要なのは芝居見物が、ファッションではなく、普段着だという指摘である。日本文化に特徴的なこの文化の「普段着性」を、ロシアならびに西欧の読者に再三にわたって強調す

るのである。そしてこう書きながら、文明の使者として来日した欧米人、とりわけキリスト教の宣教師やその妻たちが、時の政府に働きかけて、「裸取締り条例」を出させたことの虚飾性を際立たせるのである。いわく「裸と道徳は何の関係もない」のだと。

「これらの取締りが、日本の社会道徳に何らかの影響を与えるなどと思つたら滑稽千万であらう。どこの国であらうと、裸と道徳の間には直接の関係などありはしないのだ。むしろ日本の都会に外国人が流れこんできたことが、現地の住民、とりわけこれら招かれざる客ともつとも密接に接触する階級の道徳心に、悪い影響を与えたことのほうがまったく疑問の余地もない。……たしかに日本政府や文明開化論者は、その気になれば思いのままに日本の男女に服を着せることも脱がすこともできようが、この本質はそのことで少しも変わらないとわたしは思うのだ。身なりだけはいかに洒落ていても、道徳的品性は最低という令嬢がなんと多いことか！ シャツを着ないで人前に出るのを憚らないというだけで、日本の娘たちがそうした令嬢よりも品性が劣っているなどと考えるのは幼稚すぎるだろう」(八一—八三)。

画家でもあつたメーチニコフにしてみれば、裸の群集というのは願つてもない観察の対象であつたらう。中近東の諸民族をつぶさに観察してきた彼は、日本人の着物の単色性に驚き、西欧語では「灰色の群集」というが、日本ではさだめし「紺色の群集」というのがふさわしかろうと書く。そしてこの単色性と全く対照的な雑色性を示していたのが、日本人の肌の色の多様性、容貌の多彩さであつた。ここから彼は日本人雑種民族説を

提唱するのだが、人類学者、民族学者でもある彼の視線が釘付けになったのは、裸の肉体労働者の美しきであり、その身体に彫られた入墨の華やかさであった。「日本の肉体労働者たちは、衣服と体つきの美しさという点で、中流、上流の人々をはるかにしのいでいる」(四八)。「ただおもしろいのは、外国人が出現する以前から、日本の上流階級のあいだでは、裸を嫌う風潮が生まれ、それとともにそれまで広まっていた入墨の風習が姿を消し始めたことである。……わたし自身、この地で膝から肩にかけて、竜や女の顔や唐草模様を色あざやかに描きだした人々を発見することになる。……素晴らしいのは、こうした彫りものをした人々が、腰に巻いた秘めやかな手ぬぐいのほかにはなにひとつ身につけていないのに、見る者に裸体の印象を全然与えないということだ。入墨こそは裸の人間の衣裳なり、というのもむべなるかなである」(八三)。

裸好きという現象を見て、その奥に階級的差異を見抜き、なおかつ昔ながらの伝統を守る庶民の入墨姿に感動し、見惚れ、彼らが生命感、躍動感にあふれていることに注目するのである。しかもこの裸好きと入墨という風習から、日本民族の起源を南方のマレー・ポリネシアに求めるのだから、その着眼力には目を見張らされる。晩年スイスのヌーシャテル大学教授となつたメーチニコフが研究テーマとしたのはオセアニア地方であることも、この日本人の起源の解明と無縁ではないだろう。そこにはなによりも異種の文明に対する開かれた心がある。欧米人が陥りやすいオリエンタリズムという名の自己中心主義を免れるには、こうした開かれた心を常に持つ必要があるだろう。彼の観察によれば、日本人とは単一の民族ではなく、

アイヌ、ギリヤーク系の原住民、第一次征服民のモンゴル系と大和朝廷の始祖となる第二次征服民のマレー・ポリネシア系民族からなる雑種民族であり、この征服という歴史的事実については、神話的記述、言語構造、衣食住の習慣などが語っていると彼は推理する。このあたり古事記の仏訳者ならではの卓抜な推理である。

そうしたエネルギーあふれる庶民ではあるが、そこには未開とか野蛮をにおわせるものが全くないことが彼には驚きだった。礼儀正しいばかりか、裸の人力車夫や別当、それに女中などの下層労働者までが、下帯に挟んだ読み物、あるいは袖に入れた文字通りの袖本に読みふけることに度肝を抜かれるのだった。日本文学の重層性に着目したメーチニコフに、大衆文学の手ほどきをしてくれたのが、ほかならぬ彼ら肉体労働者であつたというのだ。活字となつた漢字なら自由に読解できた彼にも、いわゆる戯作本の草書体の文字は手が出なかつたようである。ヨーロッパでもっとも初等教育が盛んなスイスですら、庶民が活字を読むなどということはまずないと、彼は云う。ロシアのナロードニキにとつても民衆の啓蒙ということが最重要課題であつたときに、この極東の島国では誰もが本をむさぼるように読んでいるとは。

「日本は中国とならんで、その政治的発展のごく初期から、国民生活における教育と啓蒙の意義を早くも理解していた世界でも数少ない国である。この遠国にわずか数日暮らすだけで、日本では実際、書物的知識と文化が国民の最下層にまで、血となり肉となつて深く浸透していることを確信できよう。……正直言うと、日本に来てからわが国(ロシア)の定期刊行

物の誌上で巻き起こった民衆教育の焦眉の課題をめぐつての激しい論争の記事を時折読んだが、それを読むにつけわたしは、あまりのコントラストに思わず赤面したものだ。われらが文明的西欧と、停滞的とされる中国—日本の東洋とのコントラストに、である。わたしは中国およびそれに隣り合う日本の島民の盲目的崇拜者になるつもりはさらさらない。わが西欧文明は、中国的東洋の難解な書物中心主義とは比較にならないほど、多面的で、広範で、豊饒であることはわたしにもはつきりわかる。だがその一方で、わたしは幾度となく次のことを認めざるをえなかつた。すなわち中国—日本の文化と比較すると、わが西欧文明は、早熟、跳ね上がり、つまり民衆の習俗と気性の奥底にまで深く根をおろしていない、なにか寄生的な兆候を明らかに示している。なるほど理論面でも実践面でもわれわれの学識は、いわば独学の日本や中国の天才ですら夢想もできぬほどの高さに達しているかもしれない。だがそのかわりに、西欧ではそうした学識は、いつまでたつても純粹に頂点でのことにとどまつているのだ。」(二二七—二二八)。こうした民度の高さを示す例として、メーチニコフはたまたま仕事を依頼した指物師が、世界地図を見て、ヨーロッパの国々をすべて言い当てたこと、また粕壁の茶店の主人が、ロシア人だと知ると、ピョートル大帝とエカテリーナ女帝のことをしきりに質問してきたこと、さらにゴロヴニンが連れ帰つたとされる漁民が著したロシア、イギリス見聞録の高度な内容を紹介する。「この見聞録の挿絵としてゴトウが描いた画の大部分は、ゲオルギーの本からの引き写しだったが、何枚かは全く独創的なものだった。ゴロヴニン艦長を捕虜にした時、松前の代官はロシアの水

兵の中に読み書きのできるものが一人もないことに驚いたというが、わたしにしてみれば日本の漁民がそうした絵や本を書けるということこそ驚きであつた」(二六六—二六七)。

このように近代西欧の科学的成果の高さは認めつつも、文化の浸透度という点から見ると、先進西欧、後進東洋という図式が逆転することを見ても確認するのである。しかもこうした文化的成熟は長い歴史の所産であると洞察し、奈良時代の淳仁天皇の勅令にはじまる日本の教育的風土を概観し、その過程で仏教僧の果たした「民主的」性格、とりわけ仮名の発明と寺子屋による文化の大衆化を高く評価するのである。その結果、メーチニコフは日本人の歴史的特性として、進取の気性とヨーロッパにも例のない社会的平等観念を引き出すのである。メーチニコフは遺著となつた『文明と歴史的大河』<sup>23</sup>(二八八九)で、文明の発展段階を、河川文明、内海文明、海洋文明と三つに分けるが、この海洋性という日本の風土にそうした特性の起源を求めるのである。そしてそこから日本をイギリスとのアナロジで捉えるという後に梅棹忠夫が『文明の生態史観』で提起した世界史認識を先取りするかのような卓抜な視点を提唱している。「日本は太平洋のアジア大陸に近いところに位置するという地理的条件からして、ヨーロッパにおけるイギリスの位置に酷似している」(II、九四)、「日本民族のそもそもの発生が、ノルマン人によるイギリスの征服と驚くべきアナロジを示している」(II、九七)。

メーチニコフによれば、土着民族の征服とともに、日本の専制権力は衰退し、四世紀頃の日本はすでに、ジョン王時代のイギリス段階の貴族制(封建制)に移行していた。専制(天皇)

権力の弱体化は、徐々に身分的障壁を崩し、「十六世紀にもなると日本は……身分的障壁のないことでは、ラテン—ゲルマン系の国々の先を越していた」(Ⅱ、九八)とされる。

このヨーロッパを凌ぐ日本人の身分的平等観念を世界に知らしめるような事件が、メーチニコフが来日する直前に起こっていた。前章で触れたマリア・ルース号事件である。これはペルー船籍のマリア・ルース号が清国の苦力クワリをアメリカに輸送中に起こった事件で、横浜寄港中に虐待に耐えかねた苦力が逃亡し、英国軍艦に救助を求めた事件である。メーチニコフがここで注目するのはこの事件で明らかになった、奴隷制に対する日本とイギリスをはじめとする西欧諸国の対処の違いであった。メーチニコフは言う。「中国人売買とニグロ売買は本質的には何ら異ならず、違いはニグロの場合、彼らめいめいはその所有者にとって何がしかの財産であり、したがってニグロが死ねば所有者には多少とも損失となつて響くということだけである。これに対し不幸な中国人苦力は、せいぜい二、三ドルの値打ちしかなく、その金額の一部は一応結んだことになつてゐる契約の手付け金として本人に支払われるものの、大部分は役人への賄賂となるのである。この商売の儲けたるやすまじく、たとえ生きた積荷の丸半分が死んでも、残り半分を売りさばけば大変な儲けとして返ってくる」(Ⅱ、一三三—一三四)。

この時イギリス領事は苦力を船長に引き渡す以外にないと判断したのに対し、神奈川県令大江卓はこれを奴隷売買事件として裁判し、苦力の釈放、本国送還を決定したのだったが、実際にこの裁判を指示したのは時の外務卿副島種臣であった。これに対しペルー国王は国際法違反として不服を申し立て、国際

裁判となり、その裁判長にはあろうことかロシア皇帝アレクサンドル二世が選ばれるのである。農奴解放から十年あまり、ロシア皇帝は世界中で解放皇帝と目されていたことの証左であろう。それにしても治外法権、不平等条約の下で、欧米を相手に奴隷制という西欧文明の暗部を堂々と批判したこの事件は、日本史においてもつと強調されていいのではあるまいか。

以上のことを総括して、メーチニコフはこう書く。

「維新或いはより正確に言えば明暗両面を持つた国際文明への参加が、日本の場合、専断とか一時的な歴史的偶然性の所産といったようなものではなく、日本の生活そのものの不可避的結果だということである。しかしながら、政治的預言者ならずとも、自信をもって明言できる。日本はこの進歩の道から後戻りすることは、もはや有機的に不可能であると。この道は険しい。しかも一方には列強の偽善的政策があり、他方、国内にも支配者集団の権勢欲があるために、日本の発展の事業は、いくつもの激動と地震(それもおそらく非常に震度の強い)なしには、その後の前進運動が望めないような軌道の上に立たされてしまつてゐる」(Ⅱ、一五一—一五二)。

むすび

メーチニコフの東京外国語学校在勤期間は一年半と短い。湿润な日本の気候のせいだろうか、それともガリバルディ軍時代の負傷の後遺症であろうか、重度の貧血症にかかり、一八七五(明治八)年十二月にはサンフランシスコに向かう船の中にい

た。前述のマクラークワに宛てた手紙で、彼は契約期間を残したまま、日本を去ることの無念さを伝えている。メーチニコフの帰国は、魯語科の生徒たちにとつてもさぞかし大きな損失であつたろう。メーチニコフの死後、彼の遺著となつた『文明と歴史的大河』を刊行した高名なアナキストで地理学者のエリゼ・ルクリュはその序文で外語時代「メーチニコフは生徒の間で絶大な人気を得ていた」と書いているが<sup>24</sup>、そこには何の誇張もなかつた。メーチニコフの高弟の一人（魯語科上等第六級）の村松愛蔵は、ほぼ時を同じくして外語を退学し、故郷の田原に戻り、民権結社恒心社を起こし、それが母体となつてのちに魯国虚無党の影響を受けたとされる飯田事件の首謀者となる。

かつて日本を代表するアナキストの石川三四郎がスイスのルクリュ家に寄寓した際、フランス語の勉強のためにとルクリュの『地人論』第八巻、極東の部を読まされたとき、初めて日本史がわかつたような気がしたと述懐しているが、石川はそれを書いたのがメーチニコフだつたとは聞かされていなかったようである。スイス帰国後のメーチニコフはルクリュの住むレマン湖の深奥部クララン村に移り、彼の助手として蔵書の整理をしつつ、この極東の部を書き上げたのだつた。石川をしてこうまで言わしめた日本論、しかもフランス語の大著『日本帝国』（一八八一）まで公刊しながら、欧米さらに本国ロシアでもメーチニコフの日本論は忘れ去られていく。それにはいくつかの要因が考えられるが、まず第一に彼がアカデミックな学者ではなかつたこと、しかも亡命の革命家だつたことがあげられる。そればかりではない。彼は長い間、生活のために論文を書き続けたために（一説によるとその数四百点に上るといふ）、分野

も歴史学、経済学、人類学、地理学、社会学、自然科学と多岐にわたり、さらには旅行記、回想記、小説までそこには含まれている。したがつてよほど丹念に時間をかけて読まないかぎり、その思想家としての価値を理解することが難しいのだ。第二には、メーチニコフの日本への視点が、あまりに時代に先駆けていたことがあげられるだろう。とりわけ日本との比較で西歐文明の野蛮性が強調されるあたりは、読むものにとまどいを与えたであろう。しかも一般の読者は、メーチニコフの豊かな人脈を知る由もないから、その論はともするとハッターとられたこともあつたに違いない。

こうしてメーチニコフは忘れられた思想家となつていくのだが、メーチニコフ自身、このことはよくわかつていたように、「進歩とは何か」と題された『文明と歴史的大河』の序文で、すでにこう書いていた。「子孫の尊敬——歴史の殉教者に対するこの遅すぎた報償——は量的に見て、かつてなし遂げられた偉業の大きさに比例したためしがない。人々の記憶に残るのは、眩しく輝くものだけであり、人類の真の善行は陽の目を見ることがもない。……歴史のパンテオンは無頼の徒、ペテン師、刑吏ばかりが住まうところなのだ……」（三四七）。

しかしこの忘れられたメーチニコフの著作をノートをとりながら克明に読んでいた作家がいた。二十世紀最大の文学者ともいわれるアイルランドの作家ジェームズ・ジョイスである。大作『フィネガンズ・ウェイク』（一九三九）の創作ノートに、『文明と歴史的大河』からの引用が多数見られることが最近ジョイス研究者によって明らかにされたのである<sup>25</sup>。

またソ連崩壊後、ナロードニキ研究者マースリンの編集に

よつて刊行された哲学事典に、ノーベル医学・生理学賞を受賞した弟のイリヤ・メーチニコフとならんで、レフ・メーチニコフが項目としてはじめて取り上げられたのだった。そこにはメーチニコフは「ユーラシア主義の先駆者」と記されていた<sup>26</sup>。

## 注

- (1) ラヴロフに関しては、佐々木照史の名著『ラヴロフのナロードニキ主義歴史哲学——虚無を越えて』（彩流社）がある。
- (2) ミハイロフスキーの『進歩とは何か？』については石川郁夫による翻訳と解説（成文社）を参照。
- (3) メーチニコフ『回想の明治維新——ロシア人革命家の手記』（渡辺雅司訳）、岩波文庫、一二二頁。なおこの著作からの引用は、以下括弧内に漢数字でページ数を示す。
- (4) См., Из переписки деятелей освободительного движения. Материалы из архива Л. И. Мечникова. Вступительная статья и публикация А. К. и О. В. Липиных. Литературное Наследство. т. 87, стр. 461-507.
- (5) ロニーについては、杉本つとむ『西洋人の日本語発見——日本語研究史・一五四九—一八六六』（創拓社）に詳しい紹介がある。
- (6) Л. И. Мечников. "Бакунин в Италии в 1864 году". — "Исторический вестник", 1897, № 3.
- (7) 「若き亡命者のなかでメーチニコフだけが書く力を持っている」とゲルツェンは書く。См. Литературное Наследство. т. 62, стр. 390. なおメーチニコフはゲルツェンの紹介で、オリガ・ロスチスラーヴォヴァ・スカリヤーチナと結婚している。

(8) Литературное Наследство. т. 87 стр. 462-463. ロズイニン(の)のスペイン旅行が、ロシアの亡命革命家とスペインの革命家との連携を画策するものだったと推測している。Литературное Наследство. т. 62, стр. 389.

(9) См., Литературное Наследство. т. 87, стр. 462-463.

(10) Léon Metchnikoff, « Les antagonistes de l'Etat en Russie », *Kolokol. Revue du développement social, politique et littéraire en Russie*, 1868, n° 8-13.

(11) 渡辺雅司「大山巖とメーチニコフ——留学生と亡命革命家」、『週刊朝日百科 日本の歴史88 近世から近代へ——⑧留学と遣欧使節団』、二四八—二四九頁。

(12) 「私はあれほどまでの仕事の能力と集中力がかつて見たことも聞いたこともなかった。彼は論文ばかりか、本でさえ下書きというものをしたことがない。しばしば論文は読み返すこともなく発送された。通常冒頭部分を私に読んでくれ、その後、会話が始めると、彼は熱中してその続きを私に語って聞かせるのだった。書いている間は、ほかのことは一切考えることができず、熱病に浮かされたように、食事とか睡眠のためにでも仕事を中断させることはできなかった。仕事が終わると、緊張した神経が一挙に緩み、それを読み返すことは退屈で嫌だった。論文が活字になつてはじめて彼はほつとするのだった。……彼は同じ部屋で騒々しい会話の中でも執筆できたし、そうした会話を聞いていて、話に加わることもさえあった。会話が執筆を妨げるようになったのは、最後の二三年だった。またマクラークワは、「メーチニコフとの出会い」と題された三二ページのタイプ原稿でこう書いている。「レフ・イリイチは角に白いクロスのかかったテーブルで食事をとっていた。独立した書齋どころか文机すら彼は持っていなかった。彼は本や論文を食事やお茶を飲

むためにあつまる家人や客人の話し声で騒がしいなか、いつも食卓の隅で書いたのだった」。Государственный Литературный Музей, Ордел рукописных фондов, ф.327, оп. I, л. 87 / 渡辺雅司「マクラークワフの回想にみるレフ・メーチニコフ」、『スラヴ文化研究』第四号、二〇〇四年、五一ページ参照。

(13) 渡辺雅司、同右、五二ページ。

(14) Л. И. Мечников. "Очерки по Швейцарии", "Отечественные записки", № 5, 7, 1868.

(15) ЛН, т. 13-14, стр. 361-362.

(16) Письма Г. Е. Дягосвееглова (1873, 1880).

(17) ЛН, т. 87, стр. 479.

(18) 『田中阿歌磨古稀記念論文集』にこんな記述がある。「明治二十年秋、母来り漸次母子諸共 Bridel 先生の家庭に在り、この頃 Léon Metchnikov 先生(曾て、東京外国語学校教師、当時 Neuchâtel 大学地理学講座担当の Elisé Reclus 先生の大地理書編纂助手)を Lausanne 近郊 Clarens に訪ね教を受へ」

(19) Léon Metchnikoff, *L'Empire japonais*, Genève, 1881, p. 222.

(20) メーチニコフの『古事記』仏語抄訳は、この雑誌に載った。Léon Metchnikoff, « Koziki, ou Furu Kotonobumi », *Livre de l'antiquité*, Ban-zai-sau [晩採草], No. 3, 1878.

(21) メーチニコフ『亡命ロシア人の見た明治維新』(渡辺雅司訳)、講談社学術文庫、一五頁。なお以下の著作からの引用は、括弧を付して(II、一五)のよう示す。

(22) Иванов-Разумник. История русской общественной мысли.

(23) Léon Metchnikoff, *La Civilisation et les grands fleuves historiques*, Paris, 1889. この著作は一八八五—一八八六年にヌーシャテル大学で

メーチニコフが行った連続講義「歴史的な大河」にもとづいている。これは「生の目的」と題された三部作の第一部をなすもので、第二部は内海文明、第三部は海洋文明となるはずであった。最初のロシア語訳は一八九七年に М. Д. Гродецкий によって「Жизнь»誌、一三二、二四号に掲載され、その後一八九九年に単行本として、エキフとハリコフで出版されている。しかしこの版は検閲を考慮して、アナキズムに関する部分は削除されていた。そのためにメーチニコフの文明観は地理的決定論ととられることになる。完全な形で翻訳されたのは一九二四年、Н. К. Лебедев 監修、訳者は Н. А. Кургская だった。Цивилизация и великие исторические реки. "Голос труда", Москва, 1924.

(24) Элизе Реклю. Предисловие к кн. Лев Ильич Мечников, "Цивилизация и великие исторические реки", Москва, 1924, стр. 26-27.

(25) Ingeborg Landuyt and Geert Lemont. *JOYCE'S SOURCES: LES GRANDS FLEUVES HISTORIQUES*. Joyce Studies Annual 6. Austin : University of Texas Press, (1995): pp.99-138. <http://www.antwerpiamesjosecenter.com/fleuve.html>.

(26) Русская филология : Словарь / под общ. ред. М. Маслина. М., ТЕРРА - Книжный клуб ; Республика, 1999. стр. 297.